

小林多寿子著

『系譜から学ぶ社会調査 20世紀の「社会へのまなざし」とリサーチ・ヘリテージ』  
嵯峨野書院（2018年）

社会調査をつうじて得られた情報に私たちは日常的に接している。ことインターネットをもちいた調査の普及は、大量のデータを生み出している。しかし、本書にも引用されているが「世の中に蔓延している『社会調査』の過半数はゴミである。始末の悪いことに、このゴミは参考にされたり、引用されたりすることで、新たなゴミを生み出している…」(谷岡2000)という指摘は極端な表現でありつつも適確な指摘といえる。リサーチ・リテラシーの習得は、社会調査の担い手のみならず、調査結果を活用し、情報発信していくうえでも不可欠となっている。

リサーチ・リテラシーを含む社会調査への理解を深め、身につけていく経路として、“これがベスト”といえるものはないように思う。個人的には「(調査は)非常に簡単なのであります。相手に電話をかけて、調査させてください、と言えばいいんです」(川喜多喬『社会調査屋気質 技法以前の話』)という実地での経験の積み重ねを重視した考え方に共感を覚えるが、他方、書店の本棚を眺めてみると、理論を重視したものから、分析手法を中心としたものまで、多種多様な社会調査のテキストが並んでいる。多様な経路があるなかで、本書は社会調査のテキストのなかでユニークといえるものである。本書がめざすところは、「社会調査とは何かを社会調査の系譜にそって理解することをめざす」ことである。本書の各章は「社会調査がいかなる方法で行われてきた」のか、そして「何があきらかにされてきたのか」といったことにこだわってまとめられている。いわば社会調査の担い手たちが見て記録してきた「社会へのまなざし」を追体験することをつうじて、社会調査への理解を深めることが本書のねらいといえる。

本書は〔第1章 リサーチ力をつちかうための社会調査論〕に続く各章で、ヨーロッパ・アメリカ、そして、日本における社会調査の系譜をおっていく。

ヨーロッパ、アメリカの社会調査の系譜を取り上げたのが、〔第2章 社会調査のルーツとヨーロッパにおける先駆者たち〕から〔第5章 『ミドルタウン』と『ピープルズ・チョイス』——アメリカにおける地域コミュニティ調査と統計的調査〕である。このなかで、ヨーロッパの社会調査の先駆者として取り上げられているのが19世紀フランスのフレデリック・ル・プレーである。ル・プレーによる『ヨーロッパの労働者』(1855)では「ヨーロッパ各地で集めた300以上の労働者家族の観察記録から厳選した36の『家族モノグラフ』」にもとづいた研究が展開されている。「少数でも全体を構成する単位を入念に分析することによって全体が明らかにされる立場をうちだした」、現地調査、質的社会調査の創始者として紹介されている。

日本の社会調査の系譜を取り上げたのが、〔第6章 明治期の社会へのまなざし——日本における社会調査の萌芽〕から〔第10章 『鋳物の町』と労働調査〕である。このうち労働調査を主題とした第10章で取り上げられる『鋳物の町』でも、調査から得られた知見(例えば、「フォーマルな労働組合も、活動実態はインフォーマルな親方-徒弟関係に支配されている」)のみならず、1947年の予備調査から1950年の第三次調査に至るまでの調査の方法も丁寧に紹介されている。

本書はテキストであるものの、社会調査に従事する身としても、改めて大切なこと、大切にすべきことを再確認させられる箇所が多い。例えば、「諸君、街に出て行って諸君のズボンの尻を『実際の』そして『本当の』調査で汚してみなさい」というロバート・E・パークの指摘、また、「客観的な事実を蒐集し記録し整理するものでなければ調査の名に値しない」という福武直の指摘(そして、「客観性とは一定の厳密に規定された手続きに従う方法的精密さと研究手続きの公開性あるいはアクセス可能性によって確保される」)がある。情報技術の発展とともに調査実施のハードルが下がり、調査データが巷にあふれる今日の社会において、それらの言葉の重みをより一層感じずにはいられない。

また、本書は各章のおわりに設けられている「社会調査者のライフヒストリー」のコラム欄も読み物として興味深い。(小熊 信)